

---

# スニーカー

usk

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スニーク

### 【Zコード】

N8704X

### 【作者名】

usuk

### 【あらすじ】

笑顔のカワイイあいつは付き合って半年経つてもあたしに手を出さない。

あたしとあいつじゃ釣り合わないことはわかってる。なら、いつそ・

(前書き)

短編3000文字シリーズ2作目です

あいつの前に立つと悔しいくらいに胸が高鳴ってしまう。付き合い始めて半年。あいつの笑顔には慣れないなあ。

「で、また呼び出したわけだ」

子供の頃からの親友は大好きなメロンソーダを御馳走すればこうしてあたしの話を聞いてくれる。でもその都度心配されて、しまいには怒られてしまう。

「あんたにあいつは無理だつて前から言つてるじゃない。傷つく前に別れた方がいいと思うよ。あいつの噂、知らないわけじゃないんでしょ？」

「うん・・・」

時計を見る。喫茶店のアンティークの時計は15時を指していた。

半年前、付き合つて欲しいと言つたのはあたしの方。あいつはあたしの決死の告白も軽く「いいよ」と流すくらい、憎たらしいほどに女慣れしてゐる。この大学に入った頃からあいつの噂は笑つてしまふほど多かった。

『高校の頃に6まししてた』とか

『一ヶ月単位で女を取りかえる』とか

『二十歳前に千人切りを達成した』とか・・・

あいつの容姿を見ると、全部がホントっぽくて逆に信じられなか

つた。実際に付き合いだしして、ほとんどが眉つばだった事も確認した。でも一つだけ、あいつの噂の中で一番嘘くそく、一番ホントっぽい噂が、未だに棘のようすに刺さつたままだつた。

『あいつは昔の彼女が忘れられなくて、本気で女と付き合えない』

「で、どうなの。いつも頻繁にあたしを呼び出すくらいだからなんとなく想像できるけど、うまくいってないの？」

氷だけになつてしまつたメロンソーダを名残惜しそうにストローで吸つて、親友は心配そうな目を向けた。

「ううん。うまくいってると思つ。あいつ意外と優しいし、あたしのわがままにも付き合つてくれるし、でも・・・」

「信じられない？」

親友の言葉が突き刺さる。あたしはあいつの事を信じてあげられないんだ。

この半年、あいつの事が好きすぎて、どうにか嫌われないようにな必死だつた。ずっとあいつの前にいなきやいけない気がして追い越されないようになつからちに進んできた。そうしないとあいつの心が他の女に向いてしまいそうで怖かつたから。だつて付き合つて半年も経つのにあたしはまだあいつに抱かれてない。今までに何度も一緒に過ごしたのに、いつもあいつの寝顔を見ながら想像を膨らませるだけで終わつてしまつた。

もしかしたらあたしのことなんて好きじゃないのかも。

そう思つて何度も別れようと決意した。でもその都度あいつの前に立つと、あたしの口は開かなくなつてしまつ。あいつの笑顔があたしから決意を奪つてしまつ。

『どうして抱いてくれないの？ホントにあたしの事好きなの？』  
訊きたいけど、訊けない。

「・・・はつきり言つてあいつとあんたは釣り合はない。言つちや悪いけどあたしにはなんであいつがあんたと付き合つてるとか解かないよ」

「うん・・・」

長年の親友は付き合いが長い分、言つことでも厳しい。でも正直に厳しい事を言つてくれるのは嬉しかった。

「やっぱり、ダメかなあ・・・」

時計が気になる。15時30分。あいつとの待ち合せまで後30分。

「今日もあいつとデート？わざから時計ばかり見てる」

あたしはまた決意してた。今日のデートであいつの気持ちを確かめられなかつたら、別れようとしてる。でもわざと思えば思つほど気持ちはそわそわして落ち着かない。情けないくらいにあいつが好きだから。別れるつて思うだけであたしは涙が出そうになつてしまつ。

「今のあんたは見てられなによ。そんなに辛い恋ならやめときなつて。なんならあたしが男紹介してあげるから」

「うん。ありがとう」

親友の笑顔がほんの少しだけあたしの心を軽くしてくれる。うん。今ならきっとと言える。

「もしだめだつたら、また付き合つてよね。飲み明かそう」

「あんたが何考てるのか解らないけど、そん時はまた呼びな。一晩でも一晩でも付き合つてやるよ」

待ち合せ場所に10分前に着く。あたしの悪い癖だ。いつも予

定より早めに来て、あいつを待つてしまひ。『んな女はきっと重いに違ひない。

「あ、今日も負けたか。いつも早いね」  
到着して間もなく、まだ来るはずない時間に背中から声がして思  
いがけず心臓が震えた。

「今日こそは俺の方が早いと思ったのに」

振り返るといつもと変わらない人懐っこい笑顔があたしの目線よ  
り若干高い位置にある。パークーにジーンズ、そしていつも同じス  
ニーカー。せっかくのデートなのにちっともオシャレをするつもり  
がないのか、こいつは。一時間以上かけて服を選んできたあたしが  
バカみたいじゃないか。

「行こつか？」

そう言って自然にあたしの手を取って歩き出す。こいつの真意は  
いつもこの笑顔の奥にあって、背の低いあたしには見えない。まず  
い、さつきまでしていた決意がまた揺らいでしまう。だってやつぱ  
りこいつの笑顔、可愛いんだもん。

あたしの決意をよそに、公園をブラブラしたり、買う気もないの  
にお店を覗いたり、いつもと変わらないノープランデート。もしか  
したら最後になるかもしれないのにこれでいいのかな。まあ決意し  
たのはあたしだけで、こいつには何も言つてないんだから仕方ない  
か。なんて考へると時間はあと今に過ぎて

「これからどうする？」

すっかり日も暮れて、公園の時計が夜の18時40分を指した頃、  
何も知らないこいつは何気なく訊ねる。その笑顔を見せないで、今  
から言うから。

正面に立つて、顔を見ないように俯きながら、意を決して口を開

く。「ねえ・・・」

あたしの田線にはボロボロのスニーカー。その足元が少し怯えた  
よつこ止まつた氣がするのはあたしの氣のせいだろつか?

「・・・あたしのことどう思つてる?」

言えた。言つてしまつた。ヤダ、返事を聞くのが恐い。だつてボロボロのスニーカーが微動だにしないもの。ほんの一瞬の間が永遠のように長く感じた。秋の木枯らしが街路樹を揺らしてざわざわと音を立てる。まるであたしの不安を煽るかのよつこ止まつた。

「どうしたの? 急に」

あたしの気持ちを知つてか知らずか、この期に及んで質問を質問で返された。

あたしは、あなたの気持ちが知りたいのに。早くしないとあたしの気持ちが終わつてしまつ。そしたらきっとまたこいつの笑顔にやられてしまうやむやになつてしまつ。

それだけは絶対ダメだ。今日ははつきりさせられて決めたんだから。

押し戻されそうな気持ちをさらりと一歩踏み出して奮い立たせる。ボロボロのスニーカーを踏みつけるくらいに体を寄せていつと顔を見上げた。

ホント言つと、何も言わなくたつていい。このままあたしの背中をギュッと痛いくらいに抱きしめてくれればそれでいい。ただあなたを感じたい。あなたの温もりを感じたいの。

際限なく高鳴つたあたしの鼓動と同じリズムでもつ一つの心音が  
聴こえる。

なに? もしかしてこいつも緊張してるの?

じつと見つめるあたしを少し悲しそうな田で見つめ返して、ゆつくり口を開く。

「まじったなあ・・・」息が顔に当たって、ほんの少しリスクの香りがした。

「そんな顔されちゃ、決心が揺らいじゃうよ」

ふつと田の前が暗くなつたと思つたら、唇に微かな違和感を感じた。ガサガサで、ちょっと冷たいけど、確かな感触。

「ホントはもつと大事にするつもりだったのに、我慢できなくなつちゃつたよ。キミがあんまり可愛いから、息が顔に触れるほどどの距離で見ると、こここの笑顔はずるこくらいに可愛すぎる。

「バカ。抱きしめてくれるだけでよかつたのに」  
「いめんね」

最後まで刺さついた棘がやつとぬけた。

(後書き)

a.i.k.oさんの曲を聴いてたら  
いつも以上に甘つちよろい短編になりました。  
usk

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8704x/>

---

スニーカー

2011年11月17日04時58分発行